

■今月の特選句

2025年12月



### 平和な国の機動隊員熊を撃つ

南とんぼ

警察官は、訓練以外に実弾を使用することは殆どない。最近の熊騒動で、実弾を使つての射撃の機会が増える。人を撃つ必要のない国でありたい。



### 四股の足真っ直ぐあげて体育の日

谷本 宴

四股は、下半身が安定し、体の軸がしっかりしていないと足を高く上げられない。相撲だけでなく、筋トレとしても優れているが、集中力も上がる。



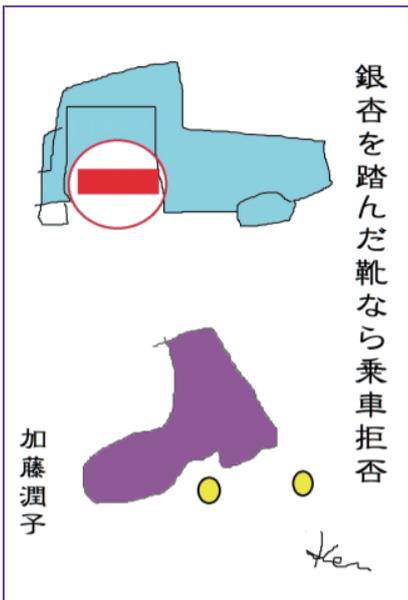
### 掘炬燵リモコン持ちて立てこもり

池嶋久春

立っている人は親でも使え。というのは炬燵で生まれた言葉かも知れぬ。掘り炬燵の心地よさは人間を横着にする。「立てこもり」が可笑しいね。

■今月の特選句

2025年12月



銀杏を踏んだ靴なら乗車拒否

加藤潤子

「お客さん、銀杏踏んでないでしょうね」。銀杏の木のある所でお客さんを拾うタクシーは、行き先よりも、靴の確認をするのが最優先である。



ワンカップ大関自販機で買ふ勤労日

高田敏男

ワンカップ大関の酒は、自分へのささやかなご褒美である。日頃の働きぶりからすれば、一ダースくらい買ってもいいが、今日は一つでよしとする。



あといくつ寝れば冥界冬隣

敷島鐵嶺

秋も深まり冬はすぐそこ。人生も季節に例えれば、今まさに晩秋となった。しかし、老いも死も衰退ではなく成熟であり人間的完成と思いたい。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

朝食は薬八錠年の暮

・・・数へてる時声かけないで

太田辰砂

稲の穂や五円玉には穴のあり

・・・稲穂と水と歯車描かれ

工藤泰子

人の世と案山子の世にある使い捨て

・・・忘るべからず感謝の気持ち

青木輝子

胸算用叶はぬままに大晦日

・・・狸の皮でも数へませうか

糸賀幸剣

銀杏発見宝探しの茶碗蒸し

・・・ここら辺りと狙ひて掘りし

上山美穂

おでん酒噂話が寄ってくる

・・・噂のネタを懐に入れ

永井流運

穂芒はおいでおいでと満月に

・・・日本各地の芒に呼ばれ

鈴木和枝

この道や行きも帰りも赤蜻蛉

・・・見送る役と迎へる役と

池田奈美子

神の旅神専用機の雲に乗り

・・・座席のクッションふわふわで

井野ひろみ

干柿やお天道様の愛甘し

・・・硬い体も柔らかかにして

卯之町空

今朝の秋試めしてみるかセルフレジ

・・・エコバッグ手にいざ出発だ

朧潤

コロツケの衣ぶ厚く秋太し

・・・ダウンジャケット着せてるみたい

桑田愛子

我が妻を誘惑に来る焼蕎屋

・・・甘い誘ひを断り切れず

壽命秀次

## ■今月の滑稽句

\* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

職業に貴賤はあらず勤労感謝の日	青木輝子
大晦日期待して待つ宝くじ	青木輝子
十一月の風に触れたる安堵かな	井口夏子
花芒狐のしつぽ見失ふ	井口夏子
満月は王子の抜け穴砂漠への	井口夏子
年の暮増える白髪を染めようか	池嶋久春
小雪や喪中葉書で歳を知る	池嶋久春
豆飯のあればご機嫌父帰宅	池田奈美子
白萩の少し零れて時を知る	池田奈美子
IT稲刈り地蔵も案山子もお邪魔虫	池田亮二
新米はシテ秋刀魚がワキで秋の膳	池田亮二
菊浮かせ高級にする大衆酒	伊藤浩睦
古米炊く日の丸弁当嫌はれて	伊藤浩睦
えびフライいつの間にやら名古屋飯	伊藤浩睦
兜虫やんちや鴉を突き返し	伊藤政一
ひとり酒火蛾一頭を侍らせて	伊藤政一
扱も扱も長靴の中ちろ虫	伊藤政一
視線から逃れ炬燵に潜り込む	糸賀幸剣
子は長じサンタクロースになれぬ父	糸賀幸剣
動かざる水の重さや冬の空	稲葉純子
クローゼットよりいざ出陣の革コート	稲葉純子
雪だるまと生き写しだねはいパチリ	稲葉純子
近道の木の実避けるは難しく	井野ひろみ
小春がたくさん携帯の斜め上	上山美穂
りんご食む草食系の人となり	上山美穂
もてなしの夕紅葉かな旅の宿	卯之町空
出汁の香のほんのり甘き夜食かな	卯之町空
名月や月見団子は写メールで	梅野光子
コスモスとカーテン揺らす秋の風	梅野光子
草紅葉踏みしめ踏みしめ京の旅	梅野光子

爽やかや裸婦像のある遊園地  
み吉野の月の雫に少し濡れ  
鉦叩はたと止みけりそれつきり  
心晴れ阿弥陀に被る冬帽子  
長老と初老が茶話クリスマス  
熊穴に入るや否やカタストロフィ  
ぼかぼかの冬の玄関蠅座る  
カレンダー九月のままに十二月  
秋の蚊のかゆさたつぷり残しけり  
天には低く吾には高し柿たわわ  
干いもをかむほどに郷近くなる  
阿波の地で阿波尾鶏食べ阿波踊  
文化の日文化会館休館日  
今月はカミさん居ません神無月  
文化学講座聴かうか文化の日  
芋よりも酒がお目当て芋煮会  
盗つ人も構へてしまふ冬構  
エアコンの効きを見上げる扇風機  
浦島草AI美女も釣れますか  
見栄つ張り恐れず屋根の柿をとる  
横になり休むコスモス揺れすぎて  
台風を刻々告げるラジオ深夜便  
秋祭紙垂を揺らして神迎ふ  
冬来るとりとめもない作句にも  
桜たち高き所で謙虚かな  
サンタさん牛車でゆるりプレゼント  
能面の翁の構へ枯蝻螂  
秋日傘メリーポピンズなら飛ぶよ  
元気が出ます芋炊きと栗飯に  
運動会の白線くつきりオニヤンマ  
ハリハリシャキシャキ太秋柿の歯ごたえは

柄川武子  
柄川武子  
柄川武子  
遠藤真太郎  
遠藤真太郎  
遠藤真太郎  
太田辰砂  
太田辰砂  
大林和代  
大林和代  
大林和代  
沖枇杷夫  
沖枇杷夫  
沖枇杷夫  
奥野元喜  
奥野元喜  
奥野元喜  
朧 潤  
朧 潤  
加藤潤子  
加藤潤子  
門屋 定  
門屋 定  
門屋 定  
北熊紀生  
北熊紀生  
工藤泰子  
工藤泰子  
黒田恵美子  
黒田恵美子  
黒田恵美子

浅ましや末期のひと刺し初冬の蚊

霜月に台風が来て大雪も

夕暮れにカラスと帰ればゴミ置き場

おでんの手羽先恐竜の欠片とも

ブランターに野菊を咲かせ飼ひ慣らす

角刈り丸刈り香りは同じ金木犀

ギョロ目して大サービスの祭り獅子

お供馬おかめも狐も獅子も舞ふ

新松子デラックスなる緑色

文化の日爪切るだけの誕生日

我が孫を靴みて探す運動会

葡萄食む妻の眼の真ん丸に

十一月の夜大根は太りきる

給食のパン初鴨に投げてやる

鈴生りの柿渋柿なら干柿に

犬が喰う夫婦喧嘩や秋の暮

町医者の子科もこなす夜長かな

玄関に飾る木の実の二つ三つ

彼岸花触れて褒めて嫉妬して

どんな草にも名がある種もある

冬はこれ芋焼酎にモツ煮込み

クリスマス私はぜんざい餅二つ

吊し柿百個食む夫老い知らず

亥の子突く唄に遅れて亥の子突く

文化の日隣のおばさん踊ってる

「地上の星」歌う八十路や文化の日

北風に第九をのせて暮れてゆく

彼是もみんな運なり冬の虹

凜凜しさやスタンドマイクを手に案山子

露時雨朝の鴉の黒光り

コンビニで酒と裂き鳥賊照紅葉

不喰芋

不喰芋

不喰芋

桑田愛子

桑田愛子

桜井美千

桜井美千

桜井美千

敷島鐵嶺

敷島鐵嶺

壽命秀次

壽命秀次

上甲 彰

上甲 彰

上甲 彰

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴木和枝

鈴木和枝

曾根ともみ

曾根ともみ

曾根ともみ

高須賀溪山

高須賀溪山

高須賀溪山

高田敏男

高田敏男

田代輔八

田代輔八

田代輔八

新米食ふその高値には面食らふ  
吾の足にまとはりつくや秋の蝶  
ひやとひのスコップで追ひし穴惑  
五百円フリマで売りしおでん鍋  
のど飴の空箱増える咳き込みて  
表裏裏表見せ柳散る  
かはらけの逸れる着地や冬近し  
日々健康新米の値は不健康  
虎造を風呂で一節翳雲  
均等にいくつに切れるか栗羊羹  
OLがダッシュで席へ秋の終電  
山猿に子熊も数多柿泥棒  
初冬や犬猫走り競ふ路地  
山畑や青みばかりの冬構  
波音のなき湖に秋のこゑ  
きらきらと自転車行くや稲の秋  
女郎花すれ違ふ人少し待つ  
蚯蚓鳴き留守番電話点減す  
長き夜の電波時計どれも無言  
満席の秋思のための木のベンチ  
神の留守義父の介護に追はれけり  
退院の迎へ待つ間の日向ぼこ  
亥の子の跡の丸いくぼみに水溜まり  
出世欲どこかに忘れおでん酒  
全社員直立不動鶴来る  
豚バラと仲の良きかな新じゃがは  
ほくほくと熱き新じゃが芋煮会  
何やかや過ごしているうちカンナ咲く  
火焰あげ千尋下る櫨紅葉  
もてこいの連呼凄まじ荒御輿  
法螺吹き天井知らず浜焚火

田中 勇  
田中 勇  
田中 勇  
谷本 宴  
谷本 宴  
月城花風  
月城花風  
月城花風  
土屋泰山  
土屋泰山  
土屋泰山  
百目鬼強  
百目鬼強  
百目鬼強  
尚山和桜  
尚山和桜  
尚山和桜  
長井多可志  
長井多可志  
長井多可志  
長井知則  
長井知則  
長井知則  
永井流運  
永井流運  
長尾七馬  
長尾七馬  
長尾七馬  
西野周次  
西野周次  
西野周次

猫じやらし子の摘みたがる家路かな  
黍嵐同僚辞職すると言ふ  
爽やかや自動運転バスに乗る  
来てすぐに行く秋に出すイエローカード  
熊哀れ早よ冬眠の季節来い  
芋名月ポテトチップをビアの友  
廃業の店に残りし酢莖石  
故郷の山川思ひ葡萄食む  
灯り消し涼しさうなる遺影かな  
枯葉舞ふやつと身軽になれました  
凡の字は風の仲間か小春の日  
スープコトコト縫い物チクチク冬うらら  
長き夜やみんなでつぶす暇がある  
手だれ技ワンクリックで稲を刈る  
神の留守神のスマホに留守電を  
チュウチュウの音の甘さよ熟柿かな  
フジ林檎くっきり映えて陽のごとし  
荒れ野にてコスモス一輪楚楚と立つ  
刈田道野良猫軍団大行進  
走る吾の後ろは無人運動会  
少子化は誰のせいかなや帰り花  
献立に困った時の茸鍋  
海へ打つ神社の太鼓浦祭  
放課後の校庭広し蜻蛉群れ  
寒暖差に襟を立てたり寝かせたり  
誰かつくって熊に聞かせる子守唄  
出鱈目が真面目に勝る木の実独楽  
古民家に絶滅危惧種竈猫  
骨のある漢が好む大海鼠

能登久美子  
能登久美子  
能登久美子  
花岡直樹  
花岡直樹  
花岡直樹  
久松久子  
久松久子  
久松久子  
日根野聖子  
日根野聖子  
日根野聖子  
藤森荘吉  
藤森荘吉  
藤森荘吉  
細川岩男  
細川岩男  
細川岩男  
ほりもとちか  
ほりもとちか  
ほりもとちか  
三木雅子  
三木雅子  
三木雅子  
南とんぼ  
南とんぼ  
峰崎成規  
峰崎成規  
峰崎成規

「我が党は」てふ言葉遊びに諸焦げる  
錆鮎もSDGsと言へまいか  
浮きの先蜻蛉に貸してまた坊主  
菊人形千両役者に水を差す  
そぞろ寒昨日と今日を重ね着す  
長き夜の足踏みをする万歩計  
捨案山子お駄賃はまだいただかず  
八十年変はらぬものあり天の川  
熊に襲はるる令和の茸狩  
Amazonの空飛ぶ絨毯届きけり  
太陽を握ったままの散紅葉  
セーターのトンネルぬけて俗の世に  
掘りたてをアピール泥付き大根は  
折らぬやう伸び上がりつつ牛蒡ひく  
俳句のひとつふたつを詠んで文化の日  
木枯が人工芝を吹き抜ける  
身構える蕎麦屋の前の真鴨かな  
十歳の子が懐かしむ七五三  
活花のオブジェで生きる枯蓮  
背に腹はかえられぬ人熊もまた  
足二本欠けて半値やずわい蟹  
電線にとまり十の字秋燕  
秋の宵夢の中へとラララララ  
正義とはアンパンマンが語る秋  
草刈に虫の追われて鳥餌かな  
ながい残暑にのびて茸も長いざんしょ  
急降下秋を飛び越す今朝の冬  
となりから失礼します落葉たち  
らっきょうの匂ひでわかる漬け具合  
雲流る良い日悪い日日向ぼこ

棕本望生  
棕本望生  
棕本望生  
村越 縁  
村越 縁  
村越 縁  
村松道夫  
村松道夫  
村松道夫  
森岡香代子  
森岡香代子  
森岡香代子  
八木 健  
八木 健  
八木 健  
八塚一青  
八塚一青  
八塚一青  
柳村光寛  
柳村光寛  
柳村光寛  
山岡純子  
山岡純子  
山岡純子  
山下正純  
山下正純  
山下正純  
横山洋子  
横山洋子  
横山洋子

光がはしゃぐ小春の木漏れ陽に  
鼻が曲がるよ銀杏を踏んだ靴  
木枯に破れ障子が泣いている  
軒の夫のもぐる蒲団は剥ぎ取られ  
通院を渋る男の根深汁  
閉経の歳を乗り越え小春かな  
やつとやつとやつと会へたね君は秋  
零余子採りパラリパラリと逃げて行く  
につこりと柵に顔出す通草の実

吉川正紀子  
吉川正紀子  
吉川正紀子  
渡部美香  
渡部美香  
渡部美香  
和田のり子  
和田のり子  
和田のり子